

コロナ禍の貼り紙がつくる公共のことば
—言語人類学からの一試論—
Capturing Public Discourse Through Store Notices Under COVID-19:
A Linguistic Anthropological Analysis

狩野 裕子 (Yuko KANO) ¹

要旨

本稿では、2020年4月の緊急事態宣言下に営業自粛を余儀なくされた東京都内の100施設に貼られた貼り紙100枚を、言語人類学の視座から質的に分析する。コロナ禍の貼り紙がつくる公共のことばはどのようなものだったのかを明らかにする。リサーチ・クエスションは次の通りである：(1) 貼り紙に書かれたことばの形式・内容に着目し、(1a) 店舗の人々はコロナ禍の貼り紙で何を表出していたのか、(1b) そこにはどのような言語的・社会文化的特徴が見出されるのかを問う。(2) 貼り紙は何を為していたのかを貼り紙の経緯と受け手から論じる。繁華街の大通りに掲げられた貼り紙には、お知らせの型が見られた。一方で商店街の貼り紙には、型にはまらない貼り紙があり、貼り紙が情動的な紐帯の場となっていた様相を指摘した。以上を踏まえて考察では、貼り紙がつくる公共のことばに、目に見えない形で入り込む監視の眼について論じた。

キーワード：コロナ禍、貼り紙、貼り紙の型、東京都、公共のことば

Abstract

This paper qualitatively analyzes, from the perspective of linguistic anthropology, the store notices posted in about 100 establishments in Tokyo under the declaration of a state of emergency in April 2020. Through the notices, I will reveal how store workers responded to the series of events that occurred during the COVID-19 pandemic and what kind of public discourse has been created through the notices. The research questions are as follows: (1) Focusing on the form and content of the words written on the notices, (1a) How did the people in the stores respond to the notices on COVID-19? (1b) What linguistic and socio-cultural characteristics can be found there? (2) What kind of “public discourse” has been created through notices along with the cooperation fund and support fund implemented by the Tokyo Metropolitan Government? By analyzing the data, locally embedded cultural patterns are found and discussed.

Keywords: COVID-19 pandemic, Store notices, Cultural patterns, Tokyo, Public discourse

1. はじめに

2020年2月後半のクルーズ船の乗客、タクシー運転手らの相次ぐ新型コロナウイルス感染は、中国国内での対岸の火事を一気に現実のものとした。感染拡大防止のため、3月

¹ 筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 博士後期課程。メール：s202030018@japan.tsukuba.ac.jp
© 2023 筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群国際日本研究学位プログラム紀要『国際日本研究』

後半から5月まで、大都市圏を中心に外出自粛期間が提唱され、人々の生活は瞬く間に変容した。東京都は2020年4月10日、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東京都における緊急事態措置等」発令し、(1)都民への徹底した外出自粛要請、(2)事業者への施設の使用停止及び催物の開催の停止要請を実施した。この発令を受けて都内の飲食店の多くは営業自粛を余儀なくされ、夜間はもちろん日中のまちの姿も一変した。

筆者は、外出自粛期間中の合間をぬって都内の自宅近辺の商店街を歩き、店舗のシャッターに休業を説明する貼り紙が多く貼られていることへの気づきを得た。休業要請が出されてすぐの貼り紙は手書きで書かれたものも多く、休業を知らせるという第一義の目的を共通に持つと思われながらも、同一のものは一つもなくさまざまであった。シャッターやドアに貼られるという貼り紙の場所性に照らせば、店舗という制度的な空間とその外側の公共空間との物理的な接点となっていた。本来は扉の内側で完結している店・店員の存在は、休業要請に伴って貼り紙を介して店の外側に顕れ、公共空間に晒された。貼り紙を通して、店舗がつい最近までは営業していたこと、休業を知らせなければならない相手(常連客)がいることが非明示的に示されていた。

本稿では、言語人類学の視座から店舗の貼り紙に書かれたことばに注目し、質的分析を試みる。店舗で働く人たちがコロナ禍の一連の出来事にどのように応答していたかを明らかにするとともに、コロナ禍の貼り紙がつくる公共のことばの様相を記述・考察することを目的とする。リサーチ・クエスションは次の通りである。(1)貼り紙に書かれたことばの形式・内容に着目し、(1a)店舗の人々はコロナ禍の貼り紙で何を表出していたのか、(1b)そこにはどのような言語的・社会文化的特徴が見出されるのかを問う。(2)貼り紙がつくる公共のことばについて、貼り紙は何を為していたのかを貼り紙の経緯と実質的な受け手から論じる。これまでの狩野(2021a, 2021b)の議論を引き継ぎつつ、本稿では貼り紙を公共のことばから論じる。以下に続く、2章では公共のことばへの言語人類学的アプローチを概観する。3章では、データの概要の提示および分析を行い、1つめのリサーチクエスションについて、言語形式と内容の類別作業を通して潜在する社会的規範を明らかにする。4章の考察では、3章の分析を踏まえ、2つめのリサーチクエスションについて、貼り紙の経緯と受け手に照らして論じ、5章で結論を述べる。

2. 貼り紙からとらえる公共のことばへの言語人類学的アプローチ

まず、本稿が対象とする貼り紙を含む言語景観研究の研究動向を概観し、次にコロナ禍の貼り紙という文脈について、そして公共のことばについて述べる。

2. 1 先行研究概観

貼り紙研究は、主として言語景観研究の範疇で扱われてきた。言語景観研究は、人文地理学や社会言語学にまたがって「公に可視的な書き言葉」(猿橋 2021; 庄司 2009; 藤井 2014; Blommaert 2013, 1)を対象とするものである。国内の言語景観研究は、標識や看板などに書かれた言葉を主たる対象とし、多言語化の変遷や施策に関連する研究(田中ら 2007; 吹原ら 2019; 藤井 2014; 彭 2018)、日本語教育の教材として扱う研究(池田 2019; 磯野 2015)等に展開していった経緯をもつ。近年では、社会言語学的に「ことばと社会の関係を示すバロメータ」(彭 2018, 24)として、分野をまたいで様々な問題提起の契機を提供する研究対象として関心が高まりつつある(猿橋 2021; 名和 2019; ハイブリット 2019)。

国外の研究に目を向ければ、標識や看板に書かれた言葉にとどまらず、より大きな枠組みで言語景観を捉えようとする視座がある。たとえば、言語景観を「公共空間の象徴的な構造として (as symbolic construction of public space)」(Bayne 2018, 137; Ben-Rafael, Shohamy & Barni 2010, xi; Ben-Rafael, Shohamy & Trumper-Hecht 2006, 10) 捉えるものや、また「超-多様性 (superdiversity)」(Vertovec 2007) の発露する「社会的、文化的、歴史的空間」(猿橋 2016, 177; Blommaert 2013, 3) としてみるものがある。これらは言語景観を、書かれた文字の集積物としてみるのではなく、当該地域の時空間的特性が顕われる場所として捉える見方である。

言語人類学者の Blommaert (2013) によれば、ここで指摘される超-多様性の社会は、モビリティ、複雑さ、予測不可能性の3つのキーワードに動かされ、これまでの知識や社会システムのありかたを根本から問い直すという (Blommaert 2013, 5-6)。あらかじめ前提とされる知識や情報はなく、すべてが移り変わる対象であり、これまでの社会に関する知識や情報はそれ自体見直され、疑義をなげかけられることとなる。それゆえ、言語 (language) を介した対面でのコミュニケーションから世界システムの構造に至るまでのレベルで、社会がどのように作用しているのか、その複雑さと対峙することの重要性を指摘する (Blommaert 2013)。

その複雑さを切り取る際に、一つの切り口となるのが権力ないしパワーである。Blommaert (2013) の「公共空間に投げられたメッセージは、常に何かしらの社会構造、権力や階級を表示するため、中立的ではありえない。[...] 公共空間におけるコミュニケーションは、結果的に権力の場におけるコミュニケーション」(Blommaert 2013, 39-40) であるという指摘や、名和 (2019) による「「超多様」となった「東京」の社会言語学的状況を動態的に捉えるためには、そうした展開にも拘わらず生き続けている、言語に対するナショナリズムと結びついた想像や実践との、常に変容しつつある緊張関係の把握が、不可欠な筈である。」(名和 2019, 78) の指摘にあるように、言語景観をマクロに捉え、権力との関連からみる研究への期待もある (猿橋 2021, 30)。

本稿では、店舗で働く人たちがコロナ禍の一連の出来事にどのように応答していたかを明らかにするとともに、貼り紙にみられる公共のこぼれ様の様相を考察することを目的とする。世界システムの解明やナショナリズムとの緊張関係の把握までは及ばないが、上述の先行研究の視点を借りて、貼り紙を公共空間に凝縮された社会・文化・歴史的な産物としてとらえる。次に、コロナ禍の貼り紙の社会的な文脈について述べる。

2. 2 コロナ禍の貼り紙

コロナ禍において、公共空間に貼り紙がそこかしこに貼られているという事態はどのような社会的文脈に位置づけられていたのだろうか。ここでは、コロナ禍の公共空間を取り巻く文脈について述べ、公共のこぼれという観点から貼り紙を扱う意義へとつなげる。

Bauman & Lyon (2013) が指摘するように、国家の政治と権力が分離し、権力の行為主体 (agency) がグローバルな流動の空間と成り代わった今日のリキッド化した社会において、人々は監視 (surveillance) によって安全 (security) と規律を見出し、技術発展がそれを加速度的に進化させるという構造は自明なものとなりつつある。他方で、そのような監視によって得られる安全は、移動やリスクといったアブノーマルで周縁化されたものを不安全 (insecurity) とすることと表裏一体であるがゆえに、安全とされる社会の実践の結果には常に不安全が伴うという (Bauman & Lyon 2013, 140)。コロナ禍において

はまさに、移動や接触のリスクを不安全とすることへの世界的な了解が築かれ、人々の生活・生存を守るための手段は、体温・血中酸素濃度といった生体情報の徹底した管理ならびに GPS 情報を駆使した逸脱行動の監視に委ねられることが示された。公共空間には、生存に対する脅威と、その抑制を担う監視という権力がどちらも目に見えない形で並存する事態が生じていたのである。

人類学者の関根(2009, 2018)は、高度に複雑化したコミュニケーションの網の世界にあって「脱ネオリベリズムを標榜し、知らぬ間に自分が自分で首を絞めていくような自己監査文化(audit cultures)の檻の中に現実生活を閉じこめていく主流傾向に歯止めをかける意図」(関根 2009, 524)から「ストリートの人類学」を掲げる。ストリートとは、現代社会全体のあり方を敏感に反映する場であり、そのような境界でおこる現象を記述することが近・現代社会批評としての人類学の社会的コミットメントだと述べている(関根 2009, 524)。コロナ禍の貼り紙もまた、現代社会のあり方を敏感に反映する場、すなわちストリートとして捉えられよう。

コロナ禍の社会は超-多様性の一要素であるモビリティが極端に制限された社会であった。営業時間短縮や閉店を知らせる貼り紙は、自治体および政府の要請に応えるという意味で要請の代弁者であり、実質的な行為主体としての役割を担っていた。それらは公共空間において、移動や飲食を伴う接触のリスクを視覚的に伝達する媒体であり、またモビリティに制限を課すものであり、貼り紙はそのような社会の変化を如実に反映するダイナミクスな性質を帯びていた。

2. 3 公共のことば

貼り紙が、社会・文化・歴史的な産物でありながらも、社会の変化を刻一刻と反映し、公共空間をつくる。この貼り紙の行為遂行的な側面に光をあてる意図から、本稿では「公共のことば」という観点を提起したい。その際、制度的場面や日常生活場面といった特定の文脈を焦点化するのではなく、用いられることばの「他者への開かれ」に注目しつつ、公共空間において書かれ、話されたことばを包括する概念として用いる。

公共については 20 世紀後半から政治哲学の議論の中でハーバーマスやアーレントを中心に議論が展開されてきた。ハーバーマスは「市民的公共性(bürgerliche Öffentlichkeit)」という概念を提示し、「さし当り、公衆として集合した私人たちの生活圏」(ハーバーマス 1994[1962], 46)と定義し、公権力に折衝するための範疇として位置づけた。アーレントの政治哲学を専門とする齋藤(2000)は、ハーバーマスの市民的公共性は、公共性の他者を排除する等質な一元的空間であったことを指摘し、その概念範疇には多義性が抜け落ちていることを指摘する(p.31)。そして、「公共性(Öffentlichkeit)」には「開かれている(Öffen; open)」の意味が含まれていることに言及し、公共性の条件として次の4つを提示する：(1)オープンであること、閉域をもたないこと、(2)人びとのいづく価値が互いに異質なものであるということ、(3)何らかのアイデンティティが制覇する空間ではなく、差異を条件とする、(4)一元的・排他的な帰属(belonging)を求めない(齋藤 2000, 5-6)。これらの条件から公共性を「価値の複数性を条件とし、共通の世界にそれぞれの仕方に関心をいづく人びとの間に生成する言説の空間」(齋藤 2000, 6)と定義する。

具体的なことばの使用から公共性を立ち上げるプロセスについては、井出(2016)が車のステッカーの事例を分析して議論している。アメリカ社会の公的場面でのスモール

トークとバンパースティッカーを取り上げた井出(2016)では、バンパースティッカーやスモルトークに、語用論的な指向性としての自己開示と詩的響鳴がみられること、それらを通して「共的(common)な理解や可笑しみを味わう感性的な快の実践領域としての公共性」(井出2016, 277)がつくられることを示す。ここでいう感性的な快とは、「自己の身体に根差しつつも、自己を超えて他者との交わりの場へと開かれていく共通性への指向」(井出2016, 277; 宮原・藤阪2012, 355)のことであり、そのような共通性への指向を生む土壌としてのことば、ことば観の存在を指摘する(井出2016, 277)。

公共のことばを問うとは、すなわち、価値の複数性の条件や人々のあいだに生成する言説の空間が、具体的にどのようなことばの使用からつくられているのかを問うことを意味する。コロナ禍の貼り紙は、緊急事態宣言とそれに伴う時間短縮営業・休業要請といった出来事に対して、人々の間に生成した言説空間の一部をなしていた。そこでは、どのような語用のうちに、他者への開かれ、共通性への土壌としてのことばがつくられていたのだろうか。

3. データの概要・分析

本章では、データの概要と分析について述べる。データの概要の前に、貼り紙が貼られるまでの経緯について概略する。2019年12月31日、WHO中国支部へ武漢での肺炎クラスター発生の報告があり、2020年1月5日付でWHOによりソーシャルメディアでの報告があった(図1)。この時点では死者は出ておらず、発症の原因は調査中とされていた。



図1: WHOによるソーシャルメディアでの「新型コロナウイルス」への最初の言及(2020年12月7日取得)

国内で最初の発症例は2020年1月15日で、3月11日にWHOは世界的なパンデミックを宣言する²。

3月13日に参議院で「新型コロナウイルス対策の特別措置法」が可決されたことを受け、政府は緊急事態宣言の発令や休業要請が可能となった。2020年4月7日、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に最初の緊急事態宣言が出され(4月16日に全国に拡大)、この宣言に伴い東京都は4月10日「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東京都における緊急事態措置等」を発令した。5月25日の解除に至るまでの

² 新型コロナウイルス発生例および発生状況については、厚生労働省のHPを参照した。2021年8月25日現在、国内の陽性者数1,335,291人(前日比+21,561人)、入院治療等を要する者の数は212,567人(前日比+3,004人)、うち重傷者数は1,964人(前日比+29人)、死亡者数は15,686人(前日比+30人)となっている。なお、国内の出来事の時系列的な記録は、岡部(2020)を参照されたい。

外出自粛期間、感染予防のための「新しい生活様式」「ステイホーム」が提唱され、都内の保育園は休園となり筆者の自宅近隣の小中学校も休校となった。

3. 1 分析データ概要

本稿の分析データは、最初の緊急事態宣言下の2020年4月21日～2020年5月15日(第一波)までに東京都豊島区西部の2つの商店街(以下、商店街Sと商店街K)と1つの繁華街(以下、繁華街I)に貼られた貼り紙100枚である。繁華街Iは、鉄道4社が乗り入れ208万人/日³が利用するターミナル駅に位置し、商店街Sと商店街Kはそれぞれ、I駅の隣駅であるS駅、K駅に隣接して立地している。100枚の内訳は、商店街Sが40枚、繁華街Iが34枚、商店街Kが26枚である。貼り紙の貼られた店舗の種類としては飲食店が多く、商店街Sでは40枚中24枚、繁華街Iでは34枚中22枚、商店街Kは26枚中12枚が飲食店であった。また、商店街Sと商店街Kのそれぞれには理髪・美容院5枚が含まれていた。

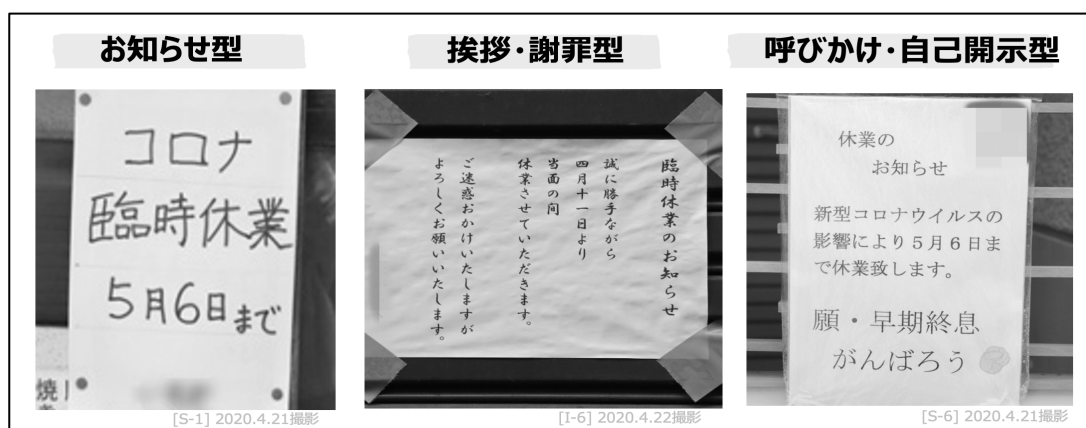
データ採取は、筆者が緊急事態措置への応答として貼られたと判断した貼り紙を対象としている。通常の営業時間を示しているのみの貼り紙や、飲食店の「TAKE OUT やっています」といった文言とともに貼られたメニュー表などは除外した。同一店舗に複数の貼り紙が貼られていた場合には休業要請に対する貼り紙をまとめて1枚として数えた。また、閉店のお知らせを掲げた貼り紙(繁華街Iで3店舗)、宗教施設に貼られた貼り紙(商店街Kで2施設、繁華街Iで1施設)、保健所等の区施設に貼られた感染対策の貼り紙(商店街S、商店街Kでそれぞれ1施設)も対象に含めていない。なお、豊島区の人口は28万人、うち外国人数2万5千人(2021年8月1日現在)で8.9%(23区内で新宿区に次いで2番目)となっている⁴。しかしながら、貼り紙に日本語以外の使用が確認できたのは、繁華街Iの3店舗3枚(外国系列の飲食チェーン店、服装店、国際送金窓口)のみであった。

3. 2 分析(1) タイプ分け

1つめのリサーチクエスチョン:(1a) コロナ禍の貼り紙で何を表出していたのか、(1b)そこにはどのような言語的・社会文化的特徴が見出されるのか、を問うにあたり、まず貼り紙の内容を「お知らせ型」「挨拶・謝罪型」「呼びかけ・自己開示型」の3タイプに分けた(図2参照)。「お知らせ型」(35枚)とは、必要最低限の情報を端的に述べているものである。基本的にすべての貼り紙に休業のお知らせが含まれており、お知らせ型がベースにあるが、それに加えて挨拶・謝罪が書かれているものは「挨拶・謝罪型」(62枚)とした。その他、終息の呼びかけなどが書かれたものは「呼びかけ・自己開示型」(3枚)とした。

³ 豊島区「駅別一日の平均乗降車人員」(平成年度・令和元年度)を参照。

⁴ 豊島区「人口・統計」(令和3年8月1日現在)を参照。



*写真内の店舗名称部分への加工は筆者による。(以降全ての写真についても同様)

図2：貼り紙の3タイプ例

このように分類することで見えてくるのは、貼り紙というジャンルを共有しながらも、異なるレジスターの使用があるということである。例えば、挨拶・謝罪型の貼り紙には、「ご迷惑をおかけして」や「ご理解ご協力をお願い申し上げます」などの定型表現の使用が顕著に見られた⁵。一方で、お知らせ型は必要最低限の情報のみを伝え、貼り紙を読む受け手へのへりくだりがみられなかった。このことは、近接した地域に位置しながら、また同一の商店街にありながら、貼り紙とはこのように書かれ・貼られるものであるという貼り紙のメタ語用をめぐり、複数の「語用共同体 (speech community)」(小山 2016, 12) が存在することを示している。

以下に、様式・立地別の特徴、貼り紙の「型」、特定の言語使用として「させていただく」の使用に着目して詳述する。

様式・立地別の特徴

商店街S、繁華街I、商店街K、それぞれのタイプの内訳、割合は図3の通りである。商店街Sと繁華街Iでは「挨拶・謝罪型」の割合が高く、商店街Kでは「お知らせ型」「挨拶・謝罪型」は同程度であった。

⁵ 「誠に勝手ながら」(5枚/100枚)や、「ご迷惑」(23枚/100枚)と休業を詫げるものや、「ご理解」(45枚/100枚)、「ご協力」(21枚/100枚)を請うものがあった。

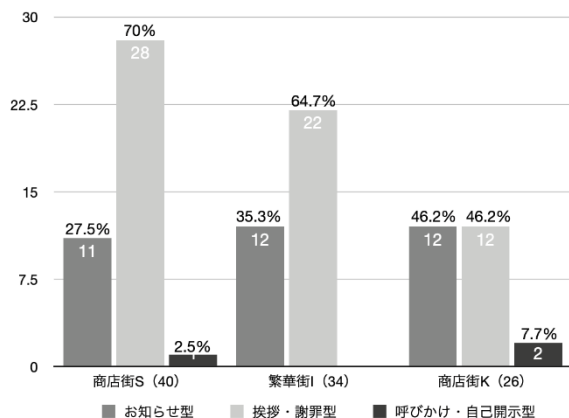


図3：対象地域ごとのタイプ別貼り紙数

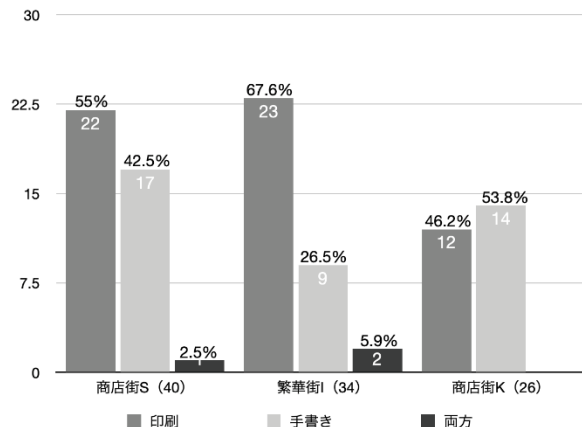


図4：立地別印刷・手書き貼り紙数

貼り紙の印刷か手書きの様式の違いについて、100枚のうち手書きは40枚（うち2枚は毛筆）、印刷は57枚、両方は3枚であった。図4は立地別の印刷・手書きの貼り紙数を示したものである。商店街Kは印刷と手書きがおおよそ半々であったが、繁華街Iに貼られた貼り紙は印刷形態が67.6%を占めていた。3タイプごとの印刷・手書きの別については、「お知らせ型」が印刷11（33.3%）、手書き22（66.7%）、「挨拶・謝罪型」が印刷44（72.1%）、手書き17（27.9%）、「呼びかけ・自己開示型」が印刷2（66.7%）、手書き1（33.3%）となっていた。今回採取したデータについては、お知らせ型には手書きが多く、挨拶・謝罪型は印刷されたものが多かった。また、繁華街Iの貼り紙には印刷されたものが多かった。

「お知らせ型」が端的に休業情報を述べるだけの内容であることから、儀礼的な要素を排除し、手書きによって緊急度の高さを非明示的に表出しているといえるだろう。一方の「挨拶・謝罪型」は、単なる情報を示すよりも貼り紙を読む相手との関係に配慮した内容となっていたといえる。逆に言えば、手書きのお知らせ型は、挨拶や謝罪をする必要のなさのあらわれでもある。それらを省いても、相手に伝わること、また相手との関係に支障をきたすことはなく、それよりも最低限の情報を知らせることに重点を置いているとわかる。商店街Kには商店街Sや繁華街Iに比べて、挨拶や謝罪をする必要のない社会的関係への指向が、また商店街Sや繁華街Iには受け手との関係性に配慮した貼り紙が多いなどが、それぞれの地域の特徴として挙げられる。いずれの地域も、休業に際して貼り紙を貼ってお知らせをする必要があるという貼り紙イデオロギーを持ち、実際に書かれた貼り紙には、貼り紙のメタ語用をめぐり複数の価値、複数の差異があったことを確認した。

挨拶・謝罪型に見られる貼り紙の「型」

次に繁華街Ⅰで印刷の挨拶・謝罪型が多くみられたことから、そこに書かれた内容についてみていく。繁華街Ⅰに印刷形態が多くみられた理由としては、飲食を含めチェーン店が多く、同系列店舗で統一の書式スタイルの貼り紙を貼るよう運営・管理主体から個別の店舗に指示があったためと考えられる。繁華街Ⅰの大通り沿いの店舗の貼り紙の一部を図5にまとめた(左から3枚)。これらの貼り紙には先述の「ご迷惑をおかけして」や「ご理解ご協力」などの定型表現があり、貼り紙のなかにも「型」があるとわかる。

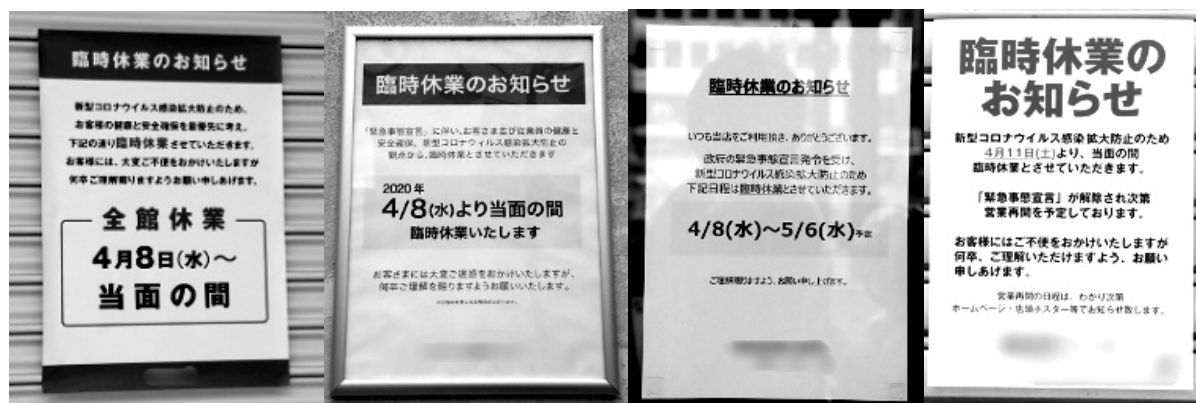


図5：繁華街Ⅰの大通りにみられた「挨拶・謝罪型」の貼り紙例
(一番左から3枚が繁華街Ⅰ、一番右はS地域のもの)(2020年4月23日撮影)

図5の貼り紙には、①休業に至った旨の通知、②休業日・休業期間の提示、③ご理解・ご協力を賜わる旨(例:「何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます」)の3点が必ず付記されている。視覚的な特徴としてタイトルは太字、また囲みや下線をひくなどの工夫がみられる。基本の文字は黒としつつ、強調箇所は赤・青字や赤・青枠やハイライトを施している。①～③の構成要素とこれらの強調の工夫が、貼り紙の「型」として前提的に了解され、共有されていることがわかる。

とはいえ、全く同一のものではなく細かな差異をつくっていたことは間違いない。具体例を挙げれば、冒頭に「いつもご利用いただきありがとうございます」といった感謝を記しているもの、休業の事由として「新型コロナウイルス感染拡大防止のため」や「緊急事態宣言を受け」といった行為連鎖・社会情勢に言及するものや、「お客様の健康と安全管理を最優先に考え」と対人的配慮を明記するなどである。また、③の末部に「大変ご不便をおかけいたしますが、なにとぞご理解ご容赦賜りますようお願い申し上げます」といった不便や迷惑を詫げる一文を加えていたものも多くみられた(図5、図6参照)。

図5の一番右のお知らせは商店街Sの個人経営の店舗であるが、ここでも同様の型に則った貼り紙が確認できる。さらに図6は手書きで書かれた挨拶・謝罪型の貼り紙であるが、いずれも①～③の構成要素を持つ⁶。これらの貼り紙から、この挨拶・謝罪型にみられる

⁶ 印刷と手書きについて比べると、手書きは、書き手の身体性が文字に委ねられている点から、統一化の程度は印刷のそれと比べて相対的に下がっていると考えられる(Kittler 1999 [1986], 27-32; 田辺 2017, 257)。

貼り紙の型は、広く共有された社会文化的な貼り紙の文化規範の型として反復され、「フラクタルな再帰性」(‘fractal recursivity’, Gal & Irvine 2019)を帯びていたといえる。

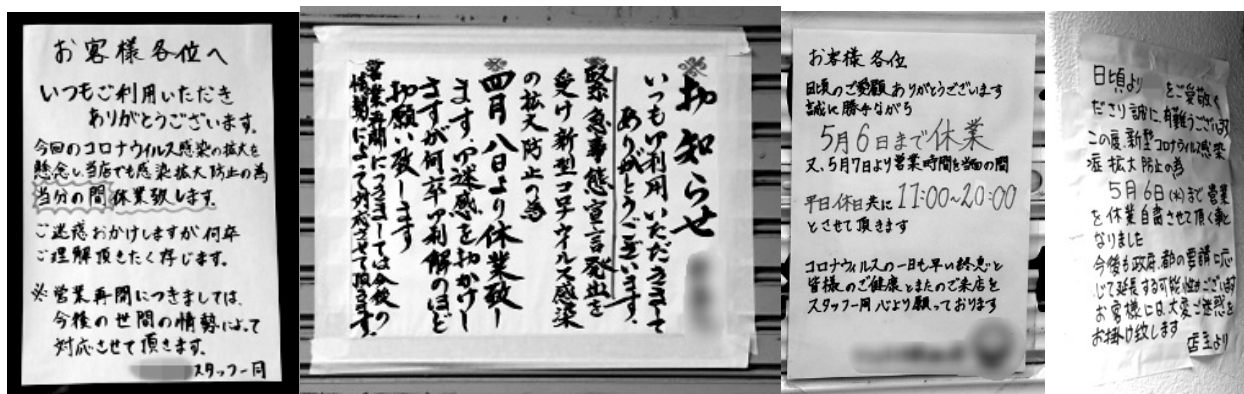


図6：貼り紙の「型」を踏まえた手書きの貼り紙
(2020年4月23日撮影)

このような「型」に則った貼り紙はまた、想像上の受け手である通行人や客がもつ、想像上の貼り紙を先取りかつ具象化したものでもある。その意味で、想像上の受け手である通行人や客は、貼り紙の型のスタイルを経験的に貼り紙の無標として認識可能な主体として、前提的に措定されているといえる。通行人や客もまた、そのような主体として貼り紙によって指し示され(index)反復されていたのである。

さらにいえば、このような型に則った貼り紙がそこかしこに貼られることによって貼り紙の型の記号的な類像化(iconization)(Gal & Irvine 2019)がすすみ、画一化・統一化された象徴性(symbol)の高い貼り紙となっていたのではないだろうか。類似の貼り紙の型がそこかしこに貼られることによって、貼り紙はこのように書くものだという貼り紙のメタ語用が生産かつ再生産を繰り返していたと考える。この「型」に則った貼り紙は、上述の文化規範を理解しうる者として通行人や客を指し示し反復させ、かつ貼り紙それ自体をも反復させる指標性と類像性の共起(indexical icon)(浅井 2020, 487; Silverstein 1976, 33-36)であったといえるだろう。

特定の語用：「させていただく」

さらに貼り紙の型に含まれる要素をみれば、そこには特定の語用「させていただく」の使用も顕著にみられた(図5、図6参照)。貼り紙100枚のうち62枚に「させていただく」の使用が確認された(うち2枚で2回使用)。ここに、貼り紙の型のうち語用レベルでの記号の類像化、一つの象徴的な記号となるプロセスがある。図7に立地別の「させていただく」の使用貼り紙数を示したが、商店街Sと繁華街Iの挨拶・謝罪型での使用に特徴がみられる。

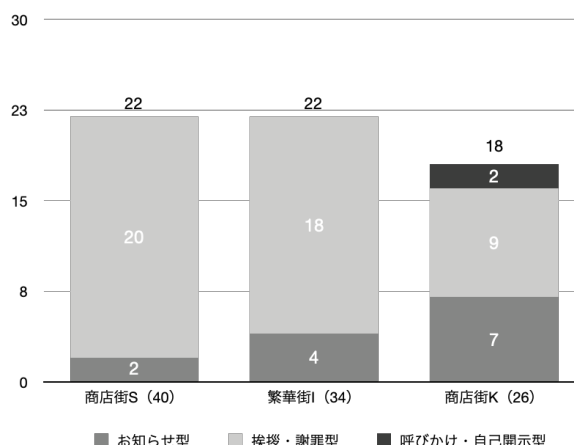


図7：立地別「させていただく」の使用貼り紙数

歴史語用論の立場から「させていただく」の使用とその機能的特徴の変遷を明らかにした椎名(2021)では、させていただくは「基本的には相手に許可をもらって行動し、それが恩恵として認識される場合に使われることになっている」(p.2)という。しかしながら、最近の使用実態からは、相手への配慮を示しつつ「自分側の尊大化が回避できるというメリットがある」(pp.208-209)こと、一種の「敬意マーカ―」になっていると指摘する。また、「〇〇させていただく」の前接部(〇〇)が多様化する一方で後接部の表現(させてくださる、など)の種類が減少していることから、「意味論的なバリエーションの増大と語用論的バリエーションの減少」(p.213)を説き、そのようなインタラクションや交渉を回避する丁寧な言い方を選ぶのは、一方で合理化であり、一方で表現の貧弱化であると指摘する。

そもそも、休業に至る経緯は、東京都からの要請であり、休業に際して許可や恩恵を見出す必要はないはずである。にもかかわらず、貼り紙の中で「させていただく」を使用するのは、休業することによって生じうる交渉、たとえば非難や衝突の回避のためと考えられる。挨拶・謝罪型において使用頻度が高くなっているのは、挨拶・謝罪型の貼り紙が、休業の伝達よりも受け手との関係を指向しており、休業への理解を請う内容となっているからである。相手の恩恵・許可を先取りする形で休業を行い、それでも相手への配慮がないわけではないという自己の尊大化を回避する。相手との交渉が断たれている貼り紙の性質を踏まえて、交渉そのものの回避のために相手の恩恵・許可を先取りする必要があったのだろうか。いずれにしても「させていただく」により、読み手との関係性と矛盾することなく、接触・交渉し得ない通行人や客との衝突回避が可能になるのである。このような読み手との関係構築のプロセスは、貼り紙上に先取られており、読み手に選択の余地は与えられていない。その意味では相互行為の契機は閉ざされていたといえる。

3. 3 分析(2) 貼り紙のメタ語用的フレーム(小山2016)

本節では、貼り紙の規範性に焦点をあて、貼り紙においてどのようなふるまいがなされていたのかをみていく。その際、「メタ語用的フレーム」(小山2016)をキーワードに議論を進めたい。メタ語用的フレームとは、「コミュニケーションで言われていること、そして特になされていることを記述・解釈する時に明示的あるいは暗黙裡に用いられる

「解釈などの行為の枠組み」であり、この枠組みを共有することが語用共同体 (speech community) を構成する一つの原理となっている」(小山 2016, 12) という。まず、お知らせ型、挨拶・謝罪型の解釈枠組みについて述べ、続けて、呼びかけ・自己開示型の「連帯」について扱う。

お知らせ型、挨拶・謝罪型の解釈枠組み

ここでは、お知らせ型と挨拶・謝罪型の解釈枠組みについて考えてみたい。先述の挨拶・謝罪型に見られた貼り紙の「型」の構成要素①～③は、貼り紙はこのように書くものであるという貼り紙のメタ語用を生産し更新するものであった。ここでは3つのタイプのそれぞれのメタ語用的フレームについて詳述する。

まず、お知らせ型は、休業という行為を端的に知らせるものであった。そこには、貼り紙の型として指摘されたような読み手の理解・協力を請う文言は加えられていなかった。お知らせ型の貼り紙では、休業するという事実のみを告げており、たとえば謝罪という行為の必要ある主体としてはふるまっていなかった。したがって、お知らせ型のメタ語用的フレームには、休業を知らせるという事態が前景化している。コロナ禍の一連の出来事とそのうちに生じた事態について、端的に情報を伝えることに指向しているといえる。

次に、挨拶・謝罪型については、休業という行為を、謝罪すべき出来事として捉えていることを指摘できる。ここには、店舗のスタッフは、謝罪によって一連の事態に責任ある主体としてふるまうことが期待されているという暗黙知、ならびに店舗スタッフの規範的な立場が反映されている。先述の通り、型に即した貼り紙を前提としつつかつ再生産していることや、「させていただく」の使用などから、書き手と受け手の双方の社会的な役割を踏まえた、行為・規範への指向をみてとれる。謝罪や理解を請う文言を加え、社会規範的な「型」を参照することにより、受け手との社会的な関係性を修復すること (remedial interchanges) へと指向していたといえる (Ide 1998; Goffman 1971)。「させていただく」の使用には、相手からの非難をあらかじめ回避するための方略がとられていた。このような「型」に則った貼り紙には、責任ある規範的な主体としての店のスタンスを表出しつつ、ことばの上では通行人や客とのやりとりを回避するという二重の方略があった。その意味では、社会的関係を指向するものでありながら、相手との相互行為の契機は閉じたものとなっていた。

呼びかけ・自己開示型の「連帯」

つづいて、呼びかけ・自己開示型の貼り紙を例示し、解釈枠組みをスタンスとの関連から述べる。図8は、呼びかけ・自己開示型として分類した3枚のうちの2店舗の写真である(残り1枚は図2参照)。これらの貼り紙には、「がんばろう」、コロナに「負けない」といった表現(文字・絵文字を含む)が用いられており、情動や紐帯 ('bonding' Ide & Hata 2020) に指向しているとみる。

図8の上の貼り紙は、商店街Kに位置するパン屋のシャッターに掲げられたものである。左側の貼り紙では営業自粛を知らせる旨を述べ、右側では去年もやっていた似顔絵イベントを自粛することについて知らせている。そこには「このコロナ禍に負けない力がもっとも湧いてくるよう 去年書いてくれたお友達の似顔絵をかざらせていただきます。みなさんががんばりましょう!!」と書かれている。貼り紙の受け手を「みなさん」とし、

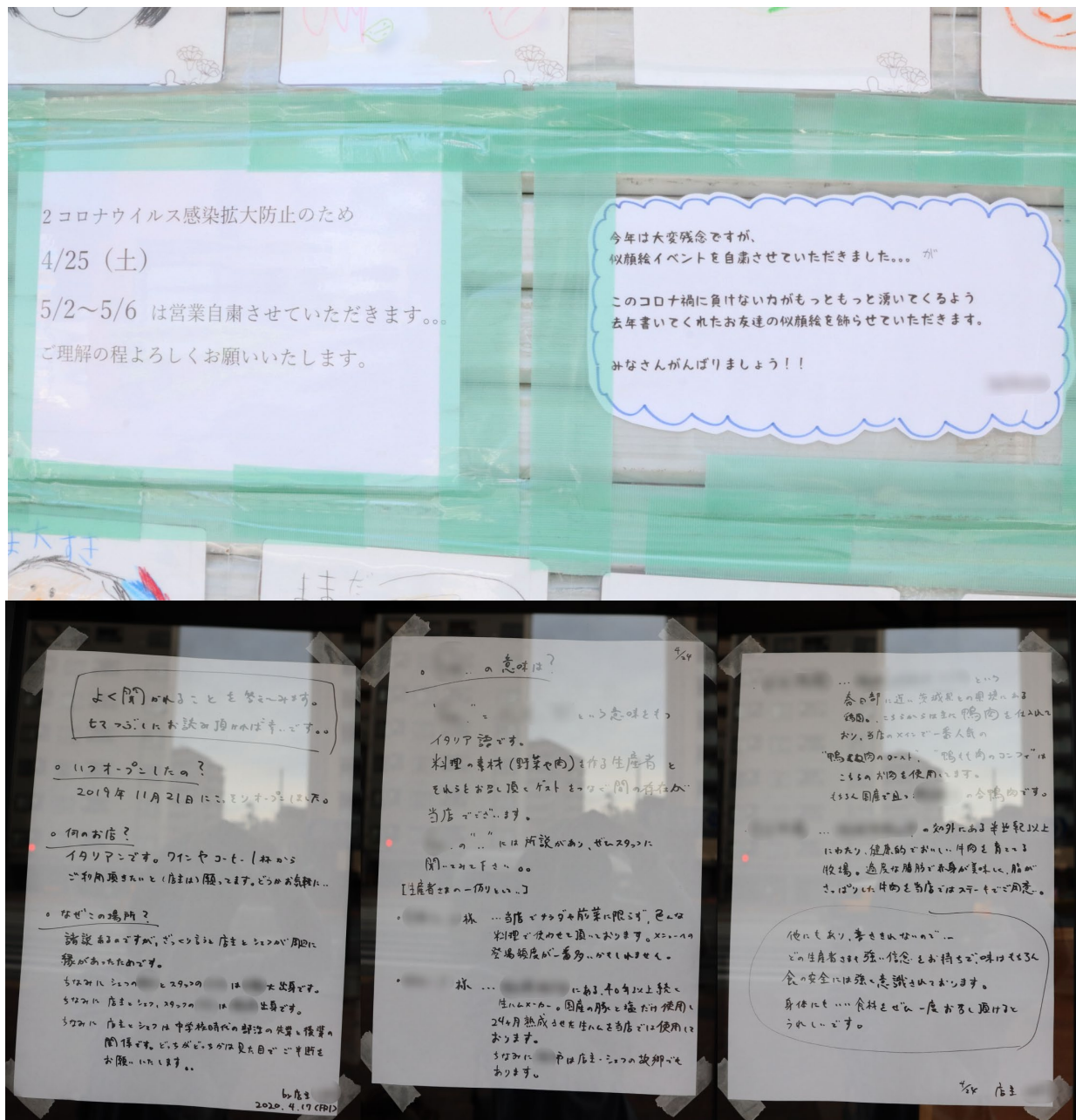


図8：「呼びかけ・自己開示型」の貼り紙
([上] 2020年4月23日、[下] 2020年5月15日撮影)

呼びかけていると同時に、「コロナ禍に負けない」というスローガンを提示し「～しましょう」という勧誘表現をともなって、ゆるやかな連帯が指向されている。

Du Bois (2007) によれば、「社会的行為者がコミュニケーションを通して相互行為的に達成する公的な行為」(井出 2014, 89; Du Bois 2007, 163)を「スタンス」という。この呼びかけを伴う貼り紙には、通行人、客をコロナという共通の敵に向かう者同士としてまきこもうとする社会的な連帯のスタンスがある。

図8の下の貼り紙は、S 駅と K 駅の間(どちらからも徒歩8分ほど)にある飲食店に貼られたものである。3 枚の貼り紙が左上から「よく聞かれることを答えてみます。ヒマ

つぶしにお読み頂ければ幸いです。」と始まり、いつオープンしたの？、何のお店？、なぜこの場所？、[店名]の意味は？、生産者さまの一例として、などの項目が並び、店舗の紹介がなされている。そのなかに「シェフの〇〇は～」とシェフの出身、お店の他のスタッフとの関係性も開示されていた。

この飲食店は信号のある交差点の角に位置しており、信号の手前の位置に貼られていることから、信号待ちの人たちに宛てて書かれたものとわかる。図8の上の貼り紙と異なり、「みなさん」と明示的な呼びかけはないものの、コロナ禍ならびに緊急事態宣言を受け、外出自粛・ステイホームが提唱されるなかで、通行人らを「読む」という行為へと巻き込み、店舗・ならびに店舗のスタッフとの交感的(phatic)な出会いの場をつくりだしていたといえる(井出2014)。コロナ禍でなければ、「ヒマつぶしにお読み頂ければ」と、ヒマな時間への言及もされず、貼り紙による自己開示はなされていなかったであろう。コロナ禍の緊急事態宣言が時間(とりわけ余暇)の使い方をも変容させたこと、その隙間に入り込む工夫がみてとれる。

呼びかけ・自己開示型の貼り紙は、休業を知らせることにも、貼り紙の規範に即して、休業の挨拶・謝罪を行うことにも指向していない。予測不可能な時期にあつて、理解や協力を求めるのではなく店舗に関わる未知なる通行人・客とのあいだの「感性的な快」(井出2016; 宮原・藤阪2012)、共時的な連帯へと指向していたといえる。貼り紙を契機にこのような連帯への指向がつけられたのであれば、そこには公共空間を歩き来する人々との相互行為への開かれ、自己を超えた他者に向き合うスタンスがあつたといえるのではないだろうか。

4. 考察：コロナ禍の貼り紙は何を為し、なぜ貼られたのか

本章では、2つめのリサーチクエスチョンについて、貼り紙は何を為していたのかをスタンスの観点からまとめつつ、なぜ貼り紙を貼らなければならなかったのかを貼り紙の経緯を追って考察する。

4. 1 貼り紙は何を為していたのか

貼り紙は休業を知らせると同時に、休業という出来事・事態をどのように捉えているかのスタンスを示していた。以下、3タイプのスタンスについてまとめなおす。

「お知らせ型」においては、休業を知らせること自体に指向しており、そこに謝罪や儀礼的な挨拶はみられなかった。休業に際して、謝罪や理解の明示的な言及ならびに謝罪や理解を受け手に請うといったやりとりは必要ではないというスタンスが示されていた。

「挨拶・謝罪型」の貼り紙には、①休業に至った旨の通知、②休業日・休業期間の提示、③ご理解・ご協力を賜わる旨(例:「何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます」)の3点を構成要素とし、強調箇所を工夫するといった貼り紙の「型」が見出された。社会文化的に構築された貼り紙の「型」を指標しつつ、反復を通して指標記号の類像化が生じるプロセスがあつたことを指摘した。謝罪や理解の文言により、受け手との社会的な関係性を指向しつつ、一方で「させていただく」の使用からは、相手からの非難をあらかじめ回避するための方略がとられていた。このような貼り紙の型には、責任ある規範的な主体としての店のスタンスを表出しつつ、ことばの上では通行人や客とのやりとりを回避するという二重の方略があつた。

「呼びかけ・自己開示型」の貼り紙からは、交感的かつ共時的な感性的快の接点としての貼り紙の価値づけをみた。休業という出来事に対して、謝罪や端的なお知らせを指向するのでもなく、行き交う人との対話の場の契機という別の意味づけ、そのような他者への開かれのスタンスを確認した。しかしながら、個人経営の店舗にあっては、この呼びかけ・自己開示型の貼り紙もまた、店舗の固有のイメージを「商品」として提供することで、新規の顧客開拓の可能性を探るという一つのマーケティング戦略であった可能性もある⁷。他者への開かれという異なる意味を生み出しつつ、貼り紙を自己言及的な手段として利用しているという理解である。この意味では、「型」にみられた回避と同様に、貼り紙は閉じたものであったともいえる。

他者への開かれについては議論の余地が残るものの、休業への意味づけをめぐって貼り紙上には複数の価値づけの実態があったことは指摘できるだろう。齋藤(2000)がいう価値の複数性は、貼り紙の3つのタイプにおけるスタンス、メタ語用、メタ語用的フレームの差異によって生み出されていた。近接地域に貼られていながらも、使われる言葉には、複数の語用共同体の存在が垣間見られた。では、こうした貼り紙はなぜ貼らなければならなかったのか。

4. 2 貼り紙は、なぜ貼られたのか

本節では、なぜ貼り紙を貼る必要があったのかについて、貼り紙が貼られた経緯を振り返りながら、実質的な受け手から「監視の眼」までを考察する。

貼り紙の経緯

4月10日に発表された東京都の「緊急事態措置等」によれば、飲食店は社会生活を維持する上で必要な施設のうち食事提供施設に該当する。東京都からの要請内容は適切な感染防止対策の協力要請、営業時間短縮の協力要請であった⁸。外食産業は市民の生活インフラであることから、適切な感染対策を実施しながら継続して営業すること(ただし朝5時から夜8時までの時短営業にて、酒類の提供は夜7時まで)とすること(宅配・テイクアウトサービスは除く)を要請していた。

この緊急事態措置等の発表に伴い、中小事業者向けの対策メニュー⁹(経営支援、感染拡大防止対策)として、感染拡大防止協力金の創設も提示された。それは、「緊急事態措置の全ての期間(令和2年4月11日から令和2年5月6日まで)の内、少なくとも令和2年4月16日から令和2年5月6日までの全ての期間において」(p.3)¹⁰、都の要請や協力依頼(時短営業ならびに休業)に協力可能な事業者へ、協力金給付の形で実施された¹¹。東京都産業労働局HPに掲示された協力金申請要項を参照すると、提出書類のひとつ

⁷ この論点は、匿名の査読者からいただいたコメントによる。この場を借りて御礼申し上げる。

⁸ https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/018/254/kinkyuuujitaisochi.pdf (最終確認2022年5月31日)

⁹ https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/655/20200410_3.pdf (最終確認2022年5月31日) なお、影響をうける企業への支援メニューに関しては、令和2年3月12日実施の第12回東京都新型コロナウイルス感染症対策本部会議のなかでもすでに言及されている。

¹⁰ 東京都産業労働局「東京都感染拡大防止協力金【申請受付要項】」(令和2年5月7日版) <https://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.lg.jp/topics/kyugyo.pdf> (最終確認2022年10月11日)

¹¹ 対象は都内に事業所がある中小の事業者のうち、都の要請や協力依頼を受け、全面的に協力頂ける事業者、支給額は50万円(2店舗以上有する事業者100万円)となっている。受付期間は令和2年4月22日から6月15日。

に「休業等の状況がわかる書類（写しで可）」（p.6）が含まれていることが確認できる。例として「休業を告知する HP、店頭ポスター、チラシ、DM 等」（p.6）が挙げられ、休

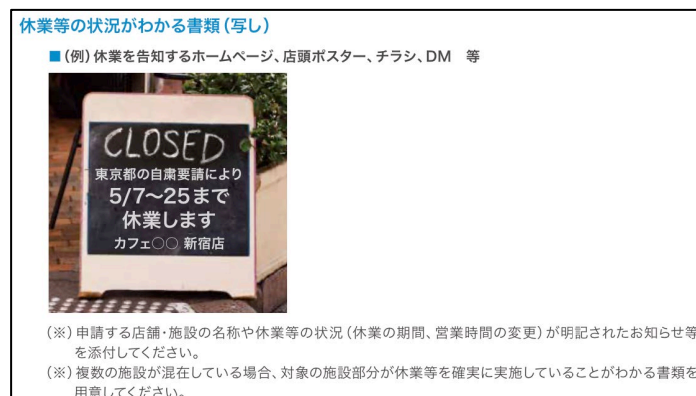


図9：協力金申請のための「休業等の状況がわかる書類（写し）」に示されたイメージ図

業する事業所等の名称や状況（休業の期間、営業時間の変更）がわかるよう工夫するよう指示されている¹²。2回目以降の申請受付要綱では図9のようなイメージ図とともに提出資料の指示がなされていた¹³。

つまり、協力金の申請を予定する店舗は、休業する旨を示す貼り紙を店舗に貼り、それを撮影し、その他の申請書類とともに東京都に提出する必要があるのである。貼り紙が貼られた理由のひとつには東京都への申請書類があったのである。

貼り紙の受け手

この経緯に照らせば、貼り紙の実質的な受け手は、店舗の前を通り過ぎる人々ではなく、第一に店舗自身であり、第二に東京都であったといえる。その貼り紙を目にする行き交う人々への休業のお知らせは、副次的な産物だったのである。このとき、貼り紙上では、貼り紙が協力金の申請に動機付けられたものであることは示されていない。貼り紙が協力金申請のための資料であるという事実は、不要なノイズとして消去（‘erasure’ Gal & Irvine 2019: 20）されていた。

言語人類学者の片岡邦好は、近年ますます形式依存を重視する「詩」の時代になりつつあることを指摘し、「記号はもはや現実を映す鏡ではなく、現実が記号を模写する時代」（片岡 2021, 2）になっていると警鐘を鳴らす。休業に伴う協力金の申請受付要項に示されたイメージ（図9）は、まさに「現実が記号を模写する時代」を象徴する。貼り紙は休業を知らせるといふ第一の目的に沿って、店舗と行き交う人々との物理的な接点を公共空間につくりだしていたと考えられたが、この貼り紙は協力金の申請のために提出すべき必

¹² 令和2年度8月分の協力金申請書類（受付期間令和2年9月1日から9月30日）より、「都が公表している「事業者向け東京都感染拡大防止ガイドライン」等を遵守し、感染防止徹底宣言ステッカーを店舗に掲示していること。」（営業時間短縮に係る感染拡大防止協力金事務取扱要綱、<https://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.lg.jp/topics/9ca497c9fc5c2850b9d2c346e1ffb240.pdf>、最終確認2022年10月11日）が提出書類に含まれた。これ以降の協力金の支給に際しては、虹色の感染防止徹底宣言ステッカーを申請し、店舗に貼っていることが要件となっている。

¹³ 東京都産業労働局「東京都感染拡大 STOP! COVID-19 防止協力金[第2回]のご案内〈申請受付要項〉」<https://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.lg.jp/topics/kyugyo2.pdf>（最終確認2022年10月11日）。受付期間は令和2年6月17日から7月17日。

要な資料でもあった。申請のための書類を作成するにあたって、手本となるイメージは、文化的に共有された貼り紙の「型」であり、その「型」は前提的な文化規範を指標しつつ、コロナ禍の公共空間に再生産され、類像化され、フラクタルな再帰性を伴う現実をつくりだしていた。コロナ禍の公共空間において、貼り紙の型が記号となって、その記号を模写した現実がそこかしこに貼られていたのである。

協力金の申請のための貼り紙にあっては、目の前を行き交う人々の存在は、必ずしも問われていなかった。むしろ目の前を行き交う人々は、要請の基準の逸脱の有無を評価する主体としての役割を、それとは知らないうちに押し付けられる存在として先取られていたと考えられる。ここに、Bauman & Lyon (2013) が指摘する監視と安全の関係の一端を垣間見ることができる。休業を知らせる貼り紙がそこかしこに貼られた状況は、要請の逸脱を「監視」する眼をもつ作用体としての私が先取りされ、私という存在が盗まれている状態である。関根(2009)のいう、「知らぬ間に自分が自分で首を絞めていくような自己監査文化 (audit cultures) の檻」は、コロナ禍の貼り紙においても見出されるのである。ここに、コロナ禍の貼り紙を介して作用する権力(本稿においては東京都の要請と協力金の管理機能)の見えないメカニズムの構造の存在が指摘できる。

5. 結論：貼り紙がつくる公共のことば

本稿では、店舗で働く人たちがコロナ禍の一連の出来事にどのように応答し、公共のことばをつくっていたのかの一端を明らかにした。公共のことばを、公共空間に書かれ、話されたことばを包括する概念として提示しつつ、他者への開かれに注目した。

コロナ禍の最初の緊急事態宣言が出された2020年4月21日～2020年5月15日に東京都内に貼られた100枚の貼り紙の分析を行った。貼り紙を3つのタイプ：お知らせ型、挨拶・謝罪型・呼びかけ・自己開示型に分け、大通りに面した店舗では挨拶・謝罪型の印刷された貼り紙が多いこと、そこには社会文化的な規範としての「型」が踏襲され、かつ再生産されている点を指摘した。また、呼びかけ・自己開示型の貼り紙には、読み手である通行人や常連客に対して連帯を呼びかけるものなどがあり、休業を知らせるという目的を超えて、貼り紙を自己を超えた他者への開かれ、相互行為の契機する場として指向するものであった。これらは貼り紙における複数の語用共同体、メタ語用ならびにメタ語用的フレームを示唆していた。

店舗に貼られた貼り紙は、行き交う人々との間の一瞬生じたコミュニケーション出来事であったかのように思えたが、その経緯を微細にみていけば協力金申請のための資料という側面を持っていた。ここに、監視によって安全と規律を見出すという Bauman & Lyon (2013) の指摘の一端をコロナ禍の貼り紙も担っていたことを論じた。公共空間には、生存に対する脅威とその抑制を担う権力がどちらも「目に見えない」形で並存する事態が生じていたのであり、貼り紙はそれらを監視する眼の存在を具象化させる媒体と化したのである。

協力金の申請資料としての役割を担っていた貼り紙については、再帰的自己(ここでは店舗)以外の宛て手を持たない、実質的にはただそこに「置かれたことば」(酒井ら2021)となっていたのではないだろうか。東京都による協力金の申請者側の条件確認、および申請者管理のための、東京都の「監視の眼」は貼り紙において類像化(Gal & Irvine 2019)され、フラクタルな再帰性(Gal & Irvine 2019)をつくりだしていた。コロナ禍の公共のことばとして貼り紙を捉えることにより、一方では他者への開かれをもち、一方で

は「監視の眼」の構造、自己監査社会の現実を同時に身に纏うという、公共のことばの複層的な現実の様相を明らかにした。この点において、コロナ禍の貼り紙がつくる公共のことばとは、片岡(2021)で指摘される「現実が記号を模写する時代」を反映するものであったといえる。

[謝辞]

本稿に先立ち、ことばと文化ゼミの皆さま、井出里咲子先生、口頭発表(狩野 2021a, 2021b)をお聴きくださった方々、査読の先生方から有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 浅井優一(2020)「始祖の痕跡 (figure) を辿る: 図/地の反転、記号過程、或いは南太平洋のリアリズム」『文化人類学』84(4): 482-502.
- 池田菜採子(2019)「上級日本語学習者が捉えた名古屋の言語景観」『ことばと文字(特集 言語景観研究)』11、日本のローマ字社、pp.58-69.
- 磯野英治(2015)「日本語教育に活用可能な言語景観の分類に関する考察」『多文化社会と留学生交流: 大阪大学国際教育交流センター研究論集』19: 35-41.
- 井出里咲子(2014)「スモールトークの公共性: アメリカ社会におけるおしゃべりとその詩的機能をめぐって」筑波大学人文社会科学現代言語・現代文化専攻『論叢: 現代言語・現代文化』12: 87-101.
- 井出里咲子(2016)「スモールトークとバンパーステッカー—公共の場におけることばの感性的快をめぐって—」村田和代・井出里咲子(編)『雑談の美学—言語研究からの再考—』ひつじ書房、pp.261-280.
- 井上史雄(2019)「言語景観の歴史—戦争と経済と国際化—」『ことばと文字(特集 言語景観研究)』11、日本のローマ字社、pp.8-20.
- 岡部信彦(2020)「これまでの出来事の総括 (chronology)」『日本内科学会雑誌』109(11): 2264-2269.
- 片岡邦好(2021)「未来を振り返って」『社会言語科学』23(2): 1-2.
- 狩野裕子(2021a)「まちなかのコロナ貼り紙がつくる公共のディスコース—」国際都市言語学会第18回年次大会、口頭発表、2021年8月28日、南京大学仙林キャンパス、中華人民共和国(オンライン).
- 狩野裕子(2021b)「置きことばとしての貼り紙—コロナ禍の公共ディスコース分析試論—」社会言語科学会第2回学生ワークショップ、口頭発表、2021年9月11日、桜美林大学バーチャルOBIRIN(オンライン).
- 小山亘(2016)「メタコミュニケーション論の射程—メタ語用的フレームと社会言語科学の全体—」『社会言語科学』19(1): 6-20.
- 齋藤純一(2000)『公共性(シリーズ思考のフロンティア)』岩波書店
- 酒井晴香・竹本理美・比内晃介・荒井愛理・儲叶明・狩野裕子(2021)「趣旨説明」社会言語科学会第2回学生ワークショップ、口頭発表、2021年9月11日、桜美林大学バーチャルOBIRIN(オンライン).
- 猿橋順子(2016)「言語景観のエスノグラフィー—明治神宮の日英語掲示物比較を事例として—」『社会言語科学』19(1): 174-189.
- 猿橋順子(2021)『国フェスの社会言語学—多言語公共空間の談話と相互作用—』三元社
- 椎名美智(2021)『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか』ひつじ書房

- 庄司博史(2009)「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか」庄司博史・ペートバックハウス・フロリアンクルマス(編)『日本の言語景観』、第1章、三元社、pp.17-52.
- 関根康正(2009)「結論と展望：なおも、<生きられる場>を穿つために：総括：『ストリートの人類学』という批評的エスノグラフィーの実践と理論」『国立民族学博物館調査報告』81: 519-556.
- 関根康正(編)(2018)『ストリート人類学—方法と理論の実践的展開』風響社
- 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央(2007)「東京圏の言語的多様性：東京圏デパート言語景観調査から」『社会言語科学』10(1): 5-17.
- 田辺龍(2017)「フリードリヒ・キットラーのメディア論再考・序説」『応用社会学研究』59: 253-263.
- 名和克郎(2019)「「東京」のことばと都市の総合的把握のために」『ことばと社会』編集委員会(編)『ことばと社会』20、三元社、pp.73-94.
- ハインリッヒ、パトリック(2019)「東京」—社会言語学的過程としての／社会言語学的経験としての(塚原信行訳)『ことばと社会』編集委員会(編)『ことばと社会』20、pp.7-24、三元社
- 吹原豊・松崎真日・磯野英治・助川泰彦(2019)「韓国安山市の多言語景観調査にみる言語景観研究の現在と可能性」『ことばと文字(特集 言語景観研究)』11、日本のローマ字社、pp.21-57.
- 藤井久美子(2014)「言語景観から考える観光と多言語状況」宮崎大学教育文化学部紀要『人文科学』29: 33-42.
- 彭国躍(2018)「上海の都市形成期における言語景観—歴史社会言語学の事例研究—」『神奈川大学言語研究』40: 23-57.
- 宮坂浩二郎・藤阪新吾(2012)『社会美学への招待——感性による社会探究——』ミネルヴァ書房
- Bauman, Z. and Lyon, D. 2013. "Liquid surveillance." Cambridge: Polity Press. (伊藤茂訳(2013)『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について—リキッド・サーベイランスをめぐる7章—』青土社)
- Bayne, K. (2018)「日本の言語景観におけるマナー啓発ポスターの特徴」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』39: 140-113.
- Ben-Rafael, E., Shohamy, E. and Barni, M. 2010. Introduction: An approach to an 'Ordered Disorder'. In Shohamy, E., Ben-Rafael, E. and Barni, M. (eds.) "Linguistic Landscape in the City." Multilingual Matters: Bristol, pp.xi-xxviii.
- Ben-Rafael, E., Shohamy, E., Hasan, A., M. and Trumper-Hecht, N. 2006. Linguistic Landscape as Symbolic Construction of the Public Space: The Case of Israel. International Journal of Multilingualism 3/1: 7-30.
- Blommaert, J. 2013. "Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity" (Critical Language and Literacy Studies 18). Bristol: Multilingual Matters.
- Du Bois, J. 2007. The stance triangle. In Englebretson, R. (ed.) "Stancetaking in Discourse", 139-182. Amsterdam: John Benjamins.
- Gal, S. and Irvine, J. T. 2019. "Signs of Difference: Language and Ideology in Social Life." Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. 1971. "Relations in public: Microstudies of the public order." New York: Basic Books.
- Habermas, J. 1962. "Strukturwandel der Öffentlichkeit-Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft." Neuwied, Berlin: Luchterhand. (ハーバーマス、ユルゲ

- ン(1973)『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』(細谷貞雄・山田正行訳)未来社)
- Ide, R. 1998. 'Sorry for your kindness': Japanese interactional ritual in public discourse. *Journal of Pragmatics*, 29: 509-529.
- Ide, R. and Hata, K. 2020. "Bonding through Context: Language and interactional alignment in Japanese situated discourse." John Benjamins Publishing Company.
- Kittler, F. 1986. *Grammophon Film Typewriter*. Berlin: Brinkmann and Bose. (石光泰夫・石光輝子訳(1999)『グラモフォン・フィルム・タイプライター』筑摩書房)
- Silverstein, M. 1976. Shifters, linguistic categories, and cultural description. In Basso, K.H. and Selby, H.A. (eds.) "Meaning in anthropology". 11-55. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Vertovec, S. 2007. Super-diversity and its implications. "Ethnic and racial studies", 30/6: 1024-1054.

参考資料

- 厚生労働省 HP「国内の発生状況など」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html
ならびに、https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html#h2_1 (いずれも2021年8月25日最終アクセス)
- 豊島区「駅別一日の平均乗降車人員」(平成年度・令和元年度)
<https://www.city.toshima.lg.jp/070/documents/7-9.pdf> (2022年7月8日最終アクセス)
- 豊島区「人口・統計」(令和3年8月1日現在)
<https://www.city.toshima.lg.jp/070/kuse/gaiyo/jinko/index.html> (2021年8月25日最終アクセス)